

教育実習指導における指導教員の成長に関する研究（2）

— 幼稚園教育実習における実習生と指導教員の相乗的向上のメカニズム —

中山美充子 森脇 有紀 掛 志穂 君岡 智央
広兼 陸 池田 明子 大上 輝明 井上 弥
朝倉 淳 児玉真樹子

1. 研究の目的

本研究は、教育実習が実習生だけでなく指導教員の成長を促すものでもあることに着目し、教育実習を通して実習生と指導教員が相乗的に高まる状況を確認するとともに、そのメカニズムを考察することを目的とする。

昨年度も同じテーマで研究を進めてきた結果、新任教員に配属された実習生は効力感・職業的同一性が上昇し、熟達教員に配属された実習生は逆に下降するという傾向が見られた。これは、熟達教員と実習生では力量の差が大きいからということが考えられる。このことから、実習生が求めるものと指導教員が指導するもののズレが少ない方が、実習生と指導教員が相乗的に向上することが考えられる。したがって、今年度は指導教員が実習生のニーズをより具体的に理解しながら、それに応じた指導のあり方を探ることで、実習生と指導教員の相乗的な向上をめざしていく。

2. 研究の方法

実習期間 2014年5月26日～6月6日まで

対象者 教育実習生（16名）

幼稚園指導教員（男性1名、女性4名）

手続き

実習生に対しては、実習開始時・中間時・終了時の3回にわたって、質問紙調査を実施した。質問紙の内容は、子ども観・保育観・効力感・職業的同一性の4観点39項目から成り、4段階評価で回答を求めた。また、「子どもを理解することについて学んだこと」「教師としてのかかわりや心構えについて学んだこと」の2項目について自由記述を行った。

指導教員に対しては、実習開始時・中間時・終了時

の3回にわたって、質問紙調査を行った。実習開始時と終了時には「実習生が子どもを理解するという点において学んだと感じたこと」「実習生が教師としてのかかわりや心構えという点において学んだと感じたこと」「実習指導において配慮していること」の3点について自由記述を行った。また、中間時には子ども理解と教師のかかわりの2点について、実習生の開始時と中間時の質問紙調査を比較し、指導教員の指導内容と実習生の所感との間に見られる共通点やズレに関する自由記述を行った。またそれぞれの時点で「実習指導において配慮すること」に関する自由記述を行った。

3. 結果と考察

（1）子ども理解に関する自由記述

①実習生の質問紙調査より

「子どもを理解するという点において学んだこと」という項目に関して、実習開始時及び終了時の記述内容を表1に示した。

表1 子どもを理解するという点について学んだこと

	記述内容
開始時	<ul style="list-style-type: none">・子どもとかかわることで理解できる・子どもの行動の前後から読み取る・直接かかわることと観察することで分かる・細かく観察する・子どもの思いを読み取る・子ども1人ひとりが違う・子どもが自分の思いを安心して出せることが大事・一つの遊びの中に多くの気づきがある・遊びに没頭している時の集中力はすごい・子ども同士の共鳴が多い

Fumiko Nakayama, Yuki Moriwaki, Shiho Kake, Tomochika Kimioka, Muthumi Hirokane, Akiko Ikeda, Teruaki Ohue, Wataru Inoue, Athushi Asakura, and Makiko Kodama: A study on the development of an adviser through guidance provided for teaching practice: Mechanisms for synergistic improvements in teaching practice between student teachers and advisers in kindergarten

開始時 及び終 了時	<ul style="list-style-type: none"> ・スキンシップをとる ・子どもと同じ目線になる ・子どもの行動には理由がある ・子どもの思いをうけとる ・子どもの思いを引き出す ・子どもの心に寄り添う ・子どもの思いを聴く ・信頼関係を築く
終了時	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと同じ所に立つ ・子どもに思いを寄せる ・子どもに対する愛情をもって理解する ・言葉だけでなく表情や仕草から理解する ・変化に気づく ・子どもと向き合う ・先入観をもたない ・一人ひとりを個として集団の中で見ていく ・表面的なかかわりをしていたら見えない ・子どもを理解しようという姿勢を示す ・保護者や他の実習生と連携をとって、子どもの心の中に迫る ・子どもの思いが見えた時、嬉しい ・言葉の中にはもっとたくさんの思いが詰まっている ・子どもは自分なりにしっかり考え、感じたことを表現している ・子どもに対する願いがある時に、いろいろな方法を試す ・子どもはすごく繊細である

表1のとおり、実習生の「子どもを理解する点について学んだこと」に関する開始時・終了時の質問紙調査を比較した結果、次のようなことが分かった。

- ・開始時と終了時で共通して見られた記述としては、子どもを理解する具体的な方法や、子どもの思いを「受け取る」「寄り添う」「引き出す」というように、子どもの思いと教師の思いのやりとりに関するものがあつた。
 - ・開始時には観察の仕方や大まかな子ども理解に関する記述が多いことに対し、終了時には子ども理解の仕方がより細やかになり、子どもと教師との内面的なやりとりという関係性に関する記述が増えている。
- また、子どもの思いが見えてきた時の喜びに関する記述も見られる。
- ・終了時には、「変化に気づく」「一人ひとりを集団の中で」「保護者や他の実習生と連携をとって」というように、子どもをその瞬間だけでなく時間の流れで見たり、集団の中の個として見たり、他の人と連

携をとったりするなど、様々な関係性の中で子どもを多面的に理解するという記述が増えている。

②指導教員の質問紙調査より

「子どもを理解するという点において学んでほしいこと」という項目に関して、実習開始時・終了時の記述内容を表2に示した。

表2 子どもを理解するという点で学んでほしいこと

	記述内容
開始時	<ul style="list-style-type: none"> ・一緒に遊ぶ中で子どもの内面が見えてくる ・場面に応じた環境づくりをする ・年齢に応じて自分でやろうとする力をもっている ・しっかりしているようでもまだ技術的・精神的に幼い所がある ・純粋な子どもの感性にふれてほしい ・実習生同士で意見を出し合い、多面的に理解する ・子どもの内面を理解しようとする姿勢 ・子どもと向き合う ・プロセスを大切にする理解
開始時 及び終 了時	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの思いに寄り添う ・子どもの行動の裏にはどのような思いがあるのかを推し量る ・言葉だけでなく表情や動きから子どもの思いや気持ちを丁寧に感じとろうとする
終了時	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども理解について具体的な姿・体験と照らし合わせて学んでいる ・集団としてではなく、一人ひとりを大切にするためにどのようななかかわり理解するかを考えるようになっている ・表面的でなく子どもの心を真剣に考えようとする姿勢が見られる ・子どもの思いをどのような形ででも出せるように配慮する ・日々振り返り、次につなげる ・子どもの思いを聴くこと・待つこと・見守ることの大切さを学んでいる

表2のとおり、指導教員の「子どもを理解する点について学んでほしいこと」に関する開始時・終了時の質問紙調査を比較した結果、次のようなことが分かった。

- ・開始時と終了時で共通して見られた記述としては、子どもの思いを理解するためには、行動や言葉だけではなく、表情や動きなどをこまやかに見ていくこ

とで子どもの思いに迫るといったものがあった。

- ・開始時には子どもを理解する方法や、気づいてほしい子どもの特徴に関する記述が多いことに対し、終了時には実習生が子ども理解について表面的ではなく具体的にあるいは内面的に学んでいることに対する手応えに関する記述が増えている。
- ・開始時には「実習生同士で意見を出し合い」多面的に子どもを理解することについて願う記述があったが、終了時には、「集団ではなく一人ひとり」「日々振り返り次につなげる」というように、多面的な理解をしていることに手応えを感じている。

また、中間時の「子どもを理解するという点において学んでほしいこと」という項目に関して、実習生と共通していると感じること、ズレを感じるものの記述内容を表3に示した。

表3 子ども理解に関する実習生と指導教員の共通点・ズレ

	記述内容
共通	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと向き合う ・子どもの内面の理解について、具体的姿・場面でとらえられている ・子どもと一緒に行動することで子どもの内面がわかってくる ・子どもの表情や動きから、その思いを丁寧と感じようとする ・子どもの思いに寄り添う・意欲を引き出すという大事さに気づいている ・年齢的に技術的に幼いところがある ・環境の影響を受けやすい
ズレ	<ul style="list-style-type: none"> ・「何のために」という部分が伝わっていない ・自分は「主体性」という点において子ども理解をあげていなかったが、あげている学生がいた ・子どもは年齢に応じて自分がやろうとする力をもっている ・実習生によって伝わり方が違うので、実習生一人ひとりに応じた指導が必要

表3のとおり、実習生の開始時と中間時の質問紙調査を比較することで指導教員が自身の指導内容との共通点やズレについて振り返った結果、次のようなことが分かった。

- ・子どもを理解するためには、「具体的姿・場面で」「子どもと一緒に行動する」「子どもの表情や動きから」というように、こまやかに動き、見取ることが共通していることが分かった。

- ・子ども理解をどのようにするかということに関しては実習生も意識が深まっているが、そもそもなぜ子どもを理解することが大切なのかという部分に実習生が意識していないことが分かった。
- ・指導者が協議会で実習生に指導していても、その受け取り方は実習生によって違うことに気づいた記述が見られた。そのことで、指導者は実習生一人ひとりに応じた指導の必要性を今後の課題としてあげている。

③考察

①②の結果をまとめてみた結果、子どもの理解に関する実習生と指導教員の関係性について、次のようなことが考えられる。

- ・実習生は実習終了時には、子ども理解の仕方が細やかになり、子どもと教師との内面的なやりとりという関係性に気づくことができるようになってきている。これは、指導教員が実習開始時より子どもの思いを理解するためには、行動や言葉だけではなく、表情や動きなどをこまやかに見ていくことに対する指導を継続してきたからだにとらえられる。
- ・実習生に同じように指導していてもそのとらえ方は実習生によって違うということに中間時に気づくことができた指導教員の姿が見られた。実習途中で指導教員自身と実習生との所感を比較して振り返ることはその後の実習の充実に向けて必要であることが分かった。

(2) 教師のかかわりや心構えに関する自由記述

①実習生の質問紙調査より

「教師のかかわりや心構えについて学んだこと」という項目に関して、実習開始時及び終了時の記述内容を表4に示した。

表4 教師のかかわりや心構えについて学んだこと

	記述内容
開始時	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの意欲を支える ・子ども同士をつなげる ・指導にメリハリをつける ・子どもの考えを引き出す ・子どものよい所を見つける ・子どもとしっかりかかわる
開始時及び終了時	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが自分で考え、自ら行動できるようにする ・子どもの思いを受け入れる ・子どもの思いを理解する ・子どもの手本になる ・環境を整える

終了時	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの人格形成にかかわることの責任感 ・子どもの目線に合わせる ・心と心を通わせる ・子どもがどのような大人になってほしいのかを考える ・自分はどんな人間でありたいのかという信念をもつ ・常に学び続ける姿勢をもつ ・実習生同士で連携する ・子どもと向き合う ・一日をふりかえって反省する ・子どもの命を預かることのできる責任感をもつ
-----	---

表4のとおり、実習生の「教師のかかわりや心構え」に関する開始時・終了時の質問紙調査を比較した結果、次のようなことが分かった。

- ・開始時と終了時で共通して見られたこととしては、「子どもを理解する」「子どもの手本になる」「子どもに自ら行動できるように願う」というように、子どもと教師との関係性にふれている記述が見られた。
- ・開始時には、「子どもの意欲を支える」「子どものよさをみつける」など子どものとらえ方や、「指導のメリハリをつける」「子ども同士をつなげる」など教師のねらいや実際のかかわり方に関する記述が見られる。それに対して、終了時には「子どもの人格形成」「子どもの将来」など子どもの成長を広くとらえたり、「自分はどのような人間でありたいのか」「常に学び続ける」など教師自身の人間観や生き方に迫る記述が増えている。

②指導教員の質問紙調査より

「教師のかかわりや心構えについて学んでほしいこと」という項目に関して、実習開始時及び終了時の記述内容を表5に示した。

表5 教師のかかわりや心構えについて学んでほしいこと

	記述内容
開始時	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもに寄り添う、子どもに向き合うということを実習生と共に学んでいきたい ・子どものよさを見る視点をもってかかわってほしい ・教材研究の大切さを感じてほしい ・先生方と協働する中で考えることが教師自身の成長につながる ・子どもの実態にふさわしい活動とは何かを学んでほしい

	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの大切な命を預かっている ・人を育てる仕事であるということに誇りをもってほしい ・子どもを愛する教師になってほしい
開始時及び終了時	<ul style="list-style-type: none"> ・教師としてはもちろんだが、人としてどうあるべきかについて学んでほしい ・感謝の気持ちと責任感をもつ ・子どもと同じ目線に立つ ・子どもの思いを理解する ・子どもにとって教師は何よりも大きな環境 ・子どもの成長を願って動く
終了時	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが自分で考え、自分から行動しようとする意欲を育んでいけるようにかかわる ・子どもと思いが通じ合った時の喜びを感じている

表5のとおり、指導教員の「教師のかかわりや心構え」に関する開始時・終了時の質問紙調査を比較した結果、次のようなことが分かった。

- ・開始時と終了時で共通して見られたこととしては、「子どもの目線に立つ」「子どもを理解する」など子ども理解に関すること、「教師の子どもに対する影響力」「人としてどうあるべきか」という教師自身の人間観や生き方に迫ること、「実習生と共に学ぶ」「教師同士で協働して学ぶ」など共に学ぶ姿勢などである。
- ・開始時には、「子どもに寄り添う」「子どものよさをとらえる」「教材研究の大切さ」「子どもを愛する」など子ども理解や教師の役割に関すること、「感謝の気持ちと責任感」「人を育てる仕事への誇り」など教師としての姿勢に関する記述が見られた。終了時には、子どもへの願いや子どもにかかわる喜びに関する記述が見られた。
- ・教師のかかわりや心構えに関しては、指導教員の意識としては実習開始から終了まで教師自身の人間観や教師としての姿勢についてなどを意識してきたととらえられる。

また、中間時の「教師のかかわり・心構えという点において学んでほしいこと」という項目に関して、実習生と共通していると感ずること、ズレを感じることの記述内容を表6に示した。

表6 教師のかかわりに関する実習生との共通点・ズレ

	記述内容
共通	<ul style="list-style-type: none"> ・「子どものため」「人として」という部分で共通するが、非常に少数 ・子どもに対する教師のかかわり方について深めている ・子どもを理解したいという気持ちをもって、子どもの言動や表情などから読み取ってかかわる ・子どもの手本になる
ズレ	<ul style="list-style-type: none"> ・自分は教師としての心構えを学んでほしいと願っていたが、実習生は主に教師のかかわりの技術面に課題意識をもっている ・実習生は、「全体と個のバランス」に課題意識をもっている ・教師自身としてどうしていかなければならないかを、実習中だけでなく残りの大学生活にもつなげていってほしい ・教師として自分を磨くこと、教師としての仕事の素晴らしさを感じてほしい ・実習生は教材研究の大切さより子どもが自分で考えてみようとするかかわりや、子どもとの信頼関係を築くことが大切だと感じていた

表6のとおり、実習生の開始時と中間時の質問紙調査を比較することで指導教員が自身の指導内容との共通点やズレについて振り返った結果、次のようなことが分かった。

- ・「子どもを理解する」「子どもの手本になる」というように子どもに対する教師のかかわり方については共通していることが分かった。
- ・「全体と個のバランス」「子どもが自分で考えようとするためのかかわり」「子どもとの信頼関係を築く」ことに実習生の意識があることが分かった。
- ・「教師としての心構え」「教師として自分を磨くこと」については実習生の所感とはずれていることが分かった。指導教員はこの部分をしっかり学んだほしいと中間時に振り返ったことが分かる。

③考察

①②の結果をまとめてみた結果、教師のかかわり・心構えに関する実習生と指導教員の関係性について、次のようなことが考えられる。

- ・「子どもを理解する」ことは実習生にとっても指導教員にとっても、実習開始時から終了まで教師のかかわりとして大切なことと一貫してとらえられている。

る。幼児教育は子どもの理解をもとに教師の意図性を絡めていくことを基本とするので、教師のかかわりにおいても子どもの理解が大切だということが改めて分かった。

- ・実習生の所感として、実習終了の際には、開始時にはあまり見られなかった子どもの成長を広くとらえたものや、教師自身の生き方や人間観に迫る記述が増えている。これは指導教員が実習開始時より教師自身の生き方や人間観に迫る指導を継続し、中間時に振り返った際にその部分のとらえにずれがあることに気づき、更に指導を継続してきたからだにとらえられる。

(3) 子ども観・保育観・効力感・職業的同一性に関する質問紙調査

実習生に対して、子ども観・保育観・効力感・職業的同一性の4観点からなる39項目について、実習開始時と終了時に質問紙調査を行った結果を、表7に示した。表内の数値は人数を示す。

表7にまとめた結果、教育実習を経て大きく変化したのは次のとおりである。

- ・「子どもは創造性豊かである」「子どもは鋭い観察力をもっている」が「とてもそう思う」が全員となっている。また一方で、「子どもは傷つきやすい」「子どもは感情が激しくコロコロ変化する」が「とてもそう思う」が増えている。逆に「子ども何も悩まず何も考えていない」が「全くそう思わない」が増えている。つまり、幼児は創造性豊かであり、鋭い観察力をもっている一方で、傷つきやすく感情も激しいし、様々なことを悩んだり考えたりしている存在だということを実習生は学ぶことができたにとらえられる。
- ・「教師は子どもの思いをありのまま受け止めるかかわりが必要である」が「とてもそう思う」が増えている。幼児教育は幼児を理解することから始まるが、実習生はその本質を学ぶことができたにとらえられる。
- ・「保育に対する教師の熱意は、必ず幼児に伝わるものである」が「とてもそう思う」が増えている。教育実習の目的の一つに教育者としての情熱や使命を自覚することがあるが、その目的に向かうことができたにとらえられる。

表7 実習生に対する子ども観・保育観・効力感・職業的同一性に関する質問項目に対する各段階を選択した人数

		とてもそう思う4		ややそう思う3		あまりそう 思わない2		全くそう 思わない1	
		PRE	POST	PRE	POST		POST	PRE	POST
1	子どもは純粹・素直・正直である	13	13	3	3	0	0	0	0
2	子どもは元気・走り回る・エネルギーにあふれる。	14	15	2	1	0	0	0	0
3	子どもは好奇心旺盛である。	14	14	2	2	0	0	0	0
4	子どもは創造性豊かである。	13	16	3	0	0	0	0	0
5	子どもは鋭い観察力をもっている	8	16	6	0	2	0	0	0
6	子どもはわがままである。	0	2	10	7	6	7	0	0
7	子どもは危険な行動をとる	4	3	10	13	2	0	0	0
8	子どもは傷つきやすい	3	9	10	7	2	0	1	0
9	子どもは感情が激しくコロコロ変化する	3	7	11	6	2	3	0	0
10	子どもは何も悩まず何も考えていない	0	0	0	0	7	2	9	14
11	子どもは環境や教育に影響を受け力を発揮し成長していく可能性がある	15	16	1	0	0	0	0	0
12	子どもは成長の速度が違う	13	13	3	3	1	0	0	0
13	教師のかかわり方が子どもを左右する	13	16	3	0	0	0	0	0
14	教師は環境を整える必要がある	15	16	1	0	0	0	0	0
15	教師は子どもの思いをありのまま受け止めるかかわりが必要である	9	14	7	2	0	0	0	0
16	教師は毎日の子どもの発見を妨げないかかわりの必要がある	12	13	4	3	0	0	0	0
17	教師は社会のルールを教えることが必要である	6	8	8	6	2	2	0	0
18	教師は、年間の保育の進め方の大枠は、指導書を参考にすべきである。	0	1	8	5	7	9	1	1
19	幼児は園で、自分から進んで活動に、参加する態度がのぞましい。	5	2	10	11	2	3	0	0
20	幼児はクラスのきまりを守り、他の幼児と協調していこうとする態度がのぞましい。	4	1	12	13	0	2	0	0
21	幼児の保育や生活の指導などには、ある程度の厳しさが必要である。	3	1	11	12	2	3	0	0
22	保育に対する教師の熱意は、必ず幼児に伝わるものである	5	9	9	5	2	2	0	0
23	教師と幼児は、親しき中にも、き然たる一線を保つべきである。	3	5	8	7	4	3	1	1
24	幼児と教師の信頼関係のうえに、よい教育活動が実現する	15	14	1	2	0	0	0	0
25	保育職は、社会と文化、人間の未来に直接かかわる、公共的使命のある職業である。	12	14	4	2	0	0	0	0
26	活動の説明が子どもにうまく伝わらなかった時に、別の説明や例を提示することができる	2	2	3	9	11	6	0	0
27	どのようにすれば、子どもたちの活動が能率よく進められるかしている	1	0	1	6	12	10	2	0
28	分かりやすい教え方ができる	0	0	1	5	12	10	3	1
29	子どもとの親密な人間関係をつくれるかどうか不安だ	1	2	10	10	5	3	0	1
30	子どもたちの中にすぐに溶け込めるか心配だ	0	0	8	8	6	7	2	1
31	子どもの目の高さでものを見ることができる	2	3	6	11	7	1	0	1
32	子どもの気持ちや考えをよく理解することができる	0	0	6	7	8	8	2	1
33	子どもの心をつかむのが上手である	0	0	3	2	13	12	0	2
34	あなたは将来教師として仕事することに自信がある	0	0	6	7	10	9	0	0
35	あなたは教師としてうまくやっていけそうな感じがある	0	0	6	10	10	6	0	0
36	あなたは教師の仕事は自分の能力を生かせると思う	1	0	13	14	2	2	1	0
37	あなたはもっと教師としての技術を磨きたい	14	16	2	0	0	0	0	0
38	あなたはもっと教師について勉強がしたい	12	16	4	2	0	0	0	0
39	職業的な生き方に関するあなたの選択は、自分なりに正しかったと確信をもっている	6	7	10	9	0	0	0	0

- ・「活動の説明が子どもにうまく伝わらなかった時に、別の説明や例を提示することができる」「どのようにすれば、子どもたちの活動が能率よく進められるか知っている」「わかりやすい教え方ができる」が「あまりそう思わない」から「ややそう思う」に増えている。また、「あなたは教師としてうまくやっけていけそうな感じがする」も「あまりそう思わない」から「ややそう思う」に増えている。実習期間中に指導技術を習得する意欲や態度が構築されたととらえられる。
- ・「あなたはもっと教師について勉強がしたい」が「とてもそう思う」が全員となっている。教師になることへの期待や使命感が高まったととらえられる。
- ・少数ではあるが、子どもとのコミュニケーションに不安を感じる実習生もいることが分かった。実習生一人ひとりの状況をよく把握し、実習生に応じた指導のあり方を更に追究していくことが必要である。

(4) 実習指導において指導教員が配慮すること

教育実習指導において指導教員がどのように成長するのかということをも明らかにするために、指導教員が実習指導において配慮することに関して、実習開始時及び終了時の記述内容を表8に示した。

表8 指導教員が実習指導において配慮すること

	記述内容
開始時及び終了時	<ul style="list-style-type: none"> ・実習生のよさを認めて自信につなげる ・実習生同士で学び合う意識を高める ・実習生の内面を理解しながらかわる ・指導教員自身が学んできたことを実習生に伝える ・実習生と共に学ぶ ・反省したことを次に生かす ・実習生の具体的ななかかわりで協議する ・周囲を気遣う大人としての態度の必要性を知らせる ・自分を高めていくために、学び続ける姿勢の大切さを知らせる
終了時	<ul style="list-style-type: none"> ・課題をもち、それについて話し合えるようにする ・見通しをもった指導に心がける

表8のとおり、指導教員が実習指導において配慮することとして、次のようなことが分かった。

- ・指導教員はまずは自分自身が成長できるように、「実習生の内面を理解する」「実習生と共に学ぶ」ことを実習開始時から終了時におけるまで配慮している。

- ・実習生が分かりやすく自信をもって学ぶことができるように、「実習生のよさを認める」「実習生の具体的ななかかわりをもとに協議する」「実習生同士で学び合う意識を高める」ことを実習開始時から終了時まで配慮している。
- ・教師としての姿勢や学ぶ意欲が高まるように、「大人として周囲を気遣うこと」「自分を高めるために学び続ける」ことを実習開始時から終了時まで配慮している。
- ・実習指導がより深まるように、「課題をもつ」「指導に見通しをもつ」ということが終了時にふりかえった時に配慮している。

4. まとめ

実習生や指導教員による自由記述と実習生による4段階評価の関連性及び指導教員の実習指導における配慮点を見た時に、次のとおり考察として述べられる。

- ・子どもをより具体的に細やかに理解することを積み重ねることを通して、「子どもは創造性豊かである」「子どもは鋭い観察力をもっている」「子どもは傷つきやすい」「子どもは感情が激しくコロコロ変化する」という項目が増えたと考えられる。また、子どもを丁寧に理解することを積み上げることで、「教師は子どもの思いをありのまま受け止めるかかわりが必要である」という項目が増えたと考えられる。
- ・教師自身の生き方や人間観に迫る指導を開始時より継続し、また中間時に確認した際に実習生とのズレに気づき指導のあり方を工夫しながら継続することで、「保育に対する教師の熱意は、必ず幼児に伝わるものである」「もっと教師について勉強がしたい」という項目が増えたと考えられる。
- ・指導教員の配慮として「実習生のよさを認める」「実習生の具体的ななかかわりをもとに協議する」「実習生同士で学び合う意識を高める」ことを積み上げてきているので、「活動の説明がうまく伝わらなかった時に、別の説明や例を提示することができる」「どのようにすれば、子どもたちの活動が能率よく進められるか知っている」「分かりやすい教え方ができる」「あなたは教師としてうまくやっけていけそうな感じがする」という項目が増えたと考えられる。

本研究では、実習生が求めるものと指導教員が指導するもののズレが少ない方が、実習生と指導教員が相乗的に向上するのではないかという仮説のもとに、研究を進めてきた。具体的には中間時に、指導教員が実習生の開始時と中間時の質問紙調査を比較し、指導教員と実習生とのズレがないかどうかということを取り

返る場を設けた。その結果、実習生と指導教員の相乗的向上のメカニズムとして、次の点が分かった。

1点目は、教育実習を通して学んでほしいこといわゆる実習のねらいを明確にもつことである。今回は「子どもを理解する」ためには、細やかな子ども理解の仕方や教師との内面的な理解に迫ること、「教師とのかわりや心構え」に関しては、実際の指導技術だけではなく、教師自身の生き方や人間観といった教育者の根幹の部分に迫ることを実習期間中を通して、あるいは実習途中で振り返りながら指導を継続してきた。そのことにより、実習生は細やかな幼児理解、教師として学ぶ意欲の向上につながったととらえられる。

2点目は、指導教員と実習生との意識の間でズレがないかどうかを確認することの重要性である。今回は、実習途中の中間時として指導教員が実習生の質問紙調査をもとに振り返る場を設けた。そのことで、「実習生によって伝わり方が違うので、一人ひとりに応じた指導が必要」「“何のために”ということが伝わっていない」など、よりきめ細やかに、あるいは何を指導するのかというポイントを意識することができた。実際、教育実習終了後の大学によるアンケートの中で、実習全体に関する満足度を問う質問紙調査では、「とても満足している」という項目が100%であったということからも、指導教員自身が自らを振り返り、実習指導の充実をめざしたことが実習生に伝わったととらえられる。

3点目は、指導教員全員による意識を共有したり高め合ったりする場の必要性である。今回は指導教員と実習生との意識の間でズレがないかどうかを確認してきたが、それはあくまでも指導教員一人ひとりがいかに

に実習生と向き合うかということにとどまっている。実際に中間時で指導教員はそれぞれ振り返る場を設けたが、個々によってそのとらえ方に差が生じていた。もちろん担当している実習生の状況や対象となる子どもの実態によって指導教員のとらえ方に差が生じるのも当然である。しかし、そのことをふまえたうえでも、指導教員全員で中間時の振り返りの場を共有することで、多面的に指導の在り方を探ることができるということが期待される。つまり、実習生と指導教員の相乗的効果をめざすためには、指導教員同士の相乗的効果をめざすことも必要である。「よさを認める」「実習生の具体的ななかかわりをもとに協議する」ことを実習開始時から終了時まで配慮していきたい。

引用（参考）文献

- 1) 池田明子・掛志穂・君岡智央・中山美充子・広兼睦・森脇有紀・升岡智子・井上弥・朝倉淳・児玉真樹子 (2013) 「教育実習指導による指導教員の成長に関する研究—幼稚園教育実習における指導教員の成長に関する研究—」『広島大学学部・附属学校共同研究研究紀要』第42号, pp.217-222.
- 2) 神原一之・秋山哲・石田浩子・松前良昌・林孝・林武広 (2012) 「教育実習指導の効果に関する研究(Ⅲ)—附属東雲小学校および同東雲中学校における実習生の意識変容に基づく検討—」第41号, pp.69-75
- 3) 山本弥栄子・小川友恵・柴本枝美 (2010) 「教育実習指導のあり方(2)—「めざす保育者像」に関する考察—」『大阪健康福祉短期大学紀要』第9号, pp.103-112